

学習障害に関する研究

分担研究報告

分担研究者 竹下 研三

要約：学習障害(LD)の概念は国や研究者の職種によってやや異なる。ICD や DSMなど医学の領域では、「LDを読み、書き、算数を中心とする大脳病理学的な障害」と考えているのに対し、全米学習障害委員会などの教育関係者は、「LDの概念を教育の立場から、聞く、話すなどの障害も含める」とする。前者は障害を disorders、後者は disabilitiesとする。狭義と広義ととらえる考えもある。研究班はこの両方の解釈を認めた上で、リサーチクエストンに答えていきたい。LDは今後増加すると予想される。LDという言葉のもつ雰囲気は社会に受け入れやすいのと、周産期医療の進歩に伴う脳障害の変化や乳幼児の発達をめぐる環境の変化が増加を予想させる。これまでの研究を踏まえ、診断や治療により効果的方法を開発したい。

見出し語：学習障害、LD、未熟児、境界知能、自閉症、注意欠陥多動

研究目的：

リサーチクエストンを研究班の研究目的とする。

1. 学習障害を早期に診断するにはどのような方法がよいかを明らかにする。
2. 彼らに効果的な介入方法はあるかを見出す。
3. 学習障害にある特定の病態は存在するかについて、とくに周産期障害児、未熟児などに焦点をあて結論を出す。

研究方法：

目的に対して、以下のような研究課題を設定し、協力者をお願いした。

- 精神医学の立場からの検討(栗田 廣)
- 神経生理学的な立場からの検討(加我牧子、宮尾益知)
- 教育心理学的な立場からの検討(細川 徹)
- 周産期リスクからの検討(松石豊次郎、原 仁)
- LD児の指導(大石敦子、進藤美津子)
- 早期診断の立場からの検討(小枝達也)

結果1(これまでの研究成果)

1. わが国における学習障害(LD)の概念について、医学、教育学からの考え方がまとめられ、広義のLDと狭義のLDという概念でお互いに相互理解が可能となった。
2. 神経生理、心理テストなどの立場からわが国の研究や診断する上での概要が把握された。
3. 発達診断上あるいは乳幼児健診上からの早期診断に関する実状やリスク児に関する状況が明らかとなった。
4. 国際シンポジウムが開催され、外国(欧米と中国)とわが国での学習障害の概念がより明らかにされた。なお、このシンポジウムの内容は製本、出版されている。

結果2(今年度のおもな研究成果)

1. 一般児童・生徒でのLDの頻度をPRSによるアンケート方式で調査した結果、0.95%にLD児の存在が疑われた。

2. 3歳児健診でLDリスクとされた児を長期に追跡すると、年齢の経過によって正常児と判断されたり、再びLDとなる児の存在が報告された。
3. 低出生体重児から運動や言語に異常がなくとも、視覚認知に特異的な障害をもつ児の存在が知られてきたが、彼らの障害は複数刺激での同時処理やパターン認知、数概念などに著大な障害あることが報告された。
4. 学習障害の近縁の障害には、広汎性発達障害、注意欠陥多動障害、境界知能障害の児がいるが、境界知能障害群は特異な注意欠陥多動に近い状態の群で、今後の対応に注意が必要であると報告された。
5. 学習障害の神経生理学的検査では、p300など長潜時での成分に特異な異常が認められているが、刺激方法にも新しいシステムの導入が試みられることになった。
6. 未熟児脳障害児からのLDについて、特異な病態が明らかにされてきており、望ましい教育のあり方の検討が始められた。
7. 学習障害の生化学的、分子生物学的な研究が始められた。
8. 聴覚からの学習障害について検討が始められた。

考察：学習障害の概念を広くとらえた上で、リサーチクエストンに答えを出していきたい。LDは今後わが国にも増加の傾向をたどると予想される。学習障害という言葉が社会に受け入れやすいこと、周産期医学の進歩による脳障害の内容の変化、生後の乳幼児をめぐる生活環境からの影響などが増加の要因として考えられる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:学習障害(LD)の概念は国や研究者の職種によってやや異なる。ICD や DSM など医学の領域では、「LD を読み、書き、算数を中心とする大脳病理学的な障害」と考えているのに対し、全米学習障害委員会などの教育関係者は、「LD の概念を教育の立場から、聞く、話すなどの障害も含める」とする。前者は障害を disorders、後者は disabilities とする。狭義と広義ととらえる考えもある。研究班はこの両方の解釈を認めた上で、リサーチクエスチョンに応じていきたい。LD は今後増加すると予想される。LD という言葉のもつ雰囲気は社会に受け入れやすいのと、周産期医療の進歩に伴う脳障害の変化や乳幼児の発達をめぐる環境の変化が増加を予想させる。これまでの研究を踏まえ、診断や治療により効果的方法を開発したい。